

論 説

古典派からマルクスへの転回

頭 川 博

はしがき—問題の所在

- 1 労働力商品の含意
- 2 古典派と剰余労働
- 3 剰余労働=超歴史説と単純流通

むすび

はしがき—問題の所在

マルクスが労働と労働力との区別によって古典派をのりこえ、剰余価値論を完成した功績はひろく知られている。しかし、独立生産者の蓄積財源をつくる労働支出をもって即剰余労働とみなすならば、労働力商品のもつ独自の歴史性が無視されるというおとし穴におちいる。というのも、蓄積財源をつくる労働支出を剰余労働とかがえれば、独立生産者は、賃労働者と同様、剰余価値をうみだすことになるからである。マルクスによれば、労働力商品が資本主義にのみ存在するのとおなじに、剰余労働は、生産条件から引き離された労働力の独特な創造物としてなりたつ。蓄積財源をつくる労働がそのまま剰余労働だという観念は、まさしく古典派経済学のそれである。つまり、蓄積財源をつくる労働を剰余労働と同一視する考えは、剰余労働がじつは資本家による生産条件の排他的な所有の所産だというマルクスの思想の対立物にはほかならない。労働生産性が増進すれば剰余労働がうまれるという立場は、文字どおり、マルクスの古典派へのあともどりをいみする。ところが、先行研究の一部にあっては、

蓄積財源をつくる労働と剰余労働の同一視が、古典派への逆転だという認識にうすい。

さらに、一步ふみこめば、蓄積財源をつくる労働と剰余労働との混同は、資本の基礎としての単純流通を独立生産者どうしのあいだの商品交換とみあやまらせる。けだし、さしあたり単純流通と資本主義との差異を労働力商品の有無におき、労働生産物である商品が労働力におきかわれば、そこに賃労働者による剰余価値生産が自動的になりたつことになるからである。ここから、『資本論』第1巻第1篇では、理論上自営業者の交換取引が分析対象として設定され、第2篇以降で労働力商品が登場し剰余価値生産が説明されるという見方がうまれる。その点で、いわば剰余労働＝超歴史説は、第1篇の単純流通を小商品生産者間の交換関係とみなす伝統的な説と不可分なつながりにある。自営業者による商品生産を起点にして剰余価値生産をといたのは、スミスをはじめとする古典派である。資本は、剰余価値をうむ価値をなし、生産物をつくる要素はすべて流通から商品として生産行為にはいるため、第1巻第1篇にあっては、労働力をふくむ全面的に発展した単純流通から分析がはじまる。といっても、第1篇では、労働生産物から労働力商品のもつ使用価値と価値の独自性を区別する必要性は存在しないため、労働生産物の商品だけが分析対象になる。だから、そうじて、商品としての労働力をその使用である労働から区別する一方、蓄積財源をつくる労働を剰余労働と同一視した場合、生産条件の排他的所有の所産としての剰余労働と単純流通との双方のとりちがえがうまれ、古典派へと逆回転するはめになる。おもうに、古典派への回帰の一大原因は、剰余価値をうむ価値と規定される資本の概念の未消化にある。なぜなら、マルクスの資本概念によれば、剰余価値をうむ主体は、価値そのものだからである。剰余価値は、労働力に投下された価値の自己増殖分である。つまり、自営業者のような価値の前貸のない労働力から、剰余価値は創造されない。ここで、剰余価値が生まれえない根拠は、蓄積財源をつくる労働も生産条件を所有する労働者の再生産のための必要労働を構成するからである。

それゆえ、本稿の課題は、剰余労働が対立的所有関係そのものの産物だという立場から、剰余労働と単純流通にかんする一部先行説には、『資本論』から

古典派経済学への後退がある事実を指摘する¹⁾。

- 1) 『資本論』が古典派をこえる最大の功績は、抽象的人間労働と剰余労働双方の特殊歴史性の発見にある。くわしくは、拙著『資本と貧困』八朔社、2010年を参照されたい。なお、『資本論』とメガの訳文は、大月書店の『マルクス・エンゲルス全集』と『資本論草稿集』によった。

1 労働力商品の含意

商品としての労働と労働力の区別は、古典派とマルクスを決定的にわかつ分水嶺である。労働者が資本家に商品として販売するのは、古典派のいう労働そのものではなく、その源泉の労働力である。「価値形成要素そのものとしての労働は価値をもちえない。」(*Kapital*, II, S. 35) 労働者が労働の価値¹⁾をうけとると仮定すれば、全労働成果が労働者に帰属することになり、資本家のポケットにはいる剰余価値の説明がつかなくなる。古典派が労働をもって商品とみなす一方、労働の価値を労働者の生活費で規定する論法は、文字どおり自己撞着にほかならない²⁾。そのため、「リカード学派は1830年ごろ剰余価値にぶつかって難破した。」(*Ibid.*, S. 25)

しかし、労働力の概念は、それが特定の労働生産性のもとで超歴史的に剰余労働を支出する属性をもつことをいみしない。換言すれば、いわば超体制的に存在する蓄積財源をつくる労働は、同時に剰余労働ではない。けだし、生産条件を所有する独立生産者は、蓄積財源をうみだすが、剰余労働を支出しないからである。

「商品所持者は彼の労働によって価値を形成することはできるが、しかし、自分を増殖する価値を形成することはできない。彼がある商品の価値を高くすることができるのは、現にある価値に新たな労働によって新たな価値を付加することによってであり、たとえば、革で長靴をつくることによってである。同じ素材が今ではより多くの価値をもつというのは、それがより大きな労働量を含んでいるからである。それゆえ、長靴は革よりも多くの価値をもっているが、しかし革の価値は元のままである。革は自分の価値を増殖したのではなく、長

靴製造中に剰余価値を身につけたのではない。」(Ibid., I, S. 180)

蓄積財源をつくる労働を剰余労働とみなす見方には、労働者からひきはなされた生産条件の排他的所有がはたす作用の看過がある。そこには、生産条件の排他的所有をもって労働力の商品への転化にのみかわらせるという狭量な観点がある。いったい、階級関係は、労働者の生活条件や労働時間に影響力をあたえないのであろうか。もし、労資関係が生活条件や労働時間にかかわるとすれば、それが必要労働や労働日と不可分だということになり、蓄積財源をつくる労働と剰余労働との短絡はゆるされないことになる。そもそも「剰余価値—資本家が前貸した価値の等価をこえる価値—」(Ibid., II, S. 385)という表現が明示するとおり、剰余価値とは、前貸された価値をこえるその超過分として概念規定される点に極力注目すべきである。剰余価値の概念規定(第4章第1節)は、それに後続して剰余労働(第7章第1節)と剰余生産物(同第4節)の規定があたえられるという論理的な先後関係をふくんでいる。

じっさい、マルクスにあっては、剰余労働の創造は、労働力商品の売買を媒介にしてはじめてとかれる。つまり、価値の前貸を基礎にして、創造された剰余価値の実体として剰余労働が説明される³⁾。労働者は、生産条件を所有する独立生産者としては1労働日全体を構成する必要労働しか支出しない一方、生産条件からの分離に対応して、必要労働分量の圧縮とそれをこえる労働日の延長という正反対の方向性をもつ作用をうける。延長される労働日と圧縮された必要労働との差額が、生産条件の排他的所有に強制された剰余労働である。だから、労働者からの生産条件の分離は、たんに労働力の商品への転化を規定するのみならず、その価値と使用価値の両面を特殊歴史的に規定する⁴⁾。剰余労働は、圧縮された必要労働の表現である労働力の価値と独自に規定されたその使用価値という二つの特殊歴史的な要素のもたらす果実にほかならない。

したがって、労働力商品の概念樹立のもつ意義は、たんに価値法則との整合性の問題だけに還元されない⁵⁾。マルクスは、労働力商品と価値法則との関係の詰めのみならず、剰余労働を生産条件の排他的所有の独自の産物として説明し、古典派経済学のコペルニクス的な転回をなしとげた。

- 1) なぜ本質としての労働力の価値が転倒して支出労働全体の価格という労賃形態をとるかの説明は、労働力の価値規定の正当性を検証する意義をもつ。労働が価格をもってあらわれるのは、それが商品とみなされるからである。「ここで労働がなにかある価格をもっているのは、それが商品とみなされるからである。」(*Ibid.*, III, S. 872) 労働が商品とみなされる理由は、物質的財貨のばあい、使用価値そのものが価値をもつ事実にある。労働力商品にあつては、労働が労働力の使用価値であるため、物質的財貨のばあいにない、労働という使用価値は、価値をもつ商品としてあらわれる。
- 2) 「リカアド氏は、価値は生産に用ひられた労働量に依存する、といふ彼の学説を、一見したところ、脅威する懼れのある難点を、実に巧みに、避けるのである。この原則にして厳密に貫かれるならば、労働の価値はそれを生産するのに用ひられた労働量に依存する、といふことになるのである—これは明かに不合理である。従つて、リカアド氏は巧みに論鋒を転じて、労働の価値をして賃銀を生産するのに必要とされた労働量に依存せしめるのである。」(サミュエル・ベერი [1791-1870] 『リカアド価値論の批判』鈴木鴻一郎訳、日本評論社、45ページ、原著1825年刊) ベーリは、本質としての価値が交換価値としてしか現象しないことから、価値概念を否定した点でも、するどい古典派批判の論陣をはった。両者ともに、古典派批判としてはあたっているため、マルクスは、ベერი評価におおきな紙面をさいている (*Kapital*, I, S. 77, S. 557)。
- 3) 蓄積財源をつくる労働と剰余労働とのとりちがえは、1865年ごろ生まれたマルクスの剰余労働概念の転換がみすごされた結果でもある。『資本論』第I巻の執筆(1866年1月-1867年4月ごろ)をまちかにして、ほぼいつの時代にもある蓄積財源や予備財源をつくる労働 (*Ibid.*, III, S. 827) は、剰余価値の実体として剰余労働の生成と区別されて考えられることになったと推測される。労働者からの生産条件の分離に対応して剰余労働が生成する一方、ぎゃくに、労働者と生産条件との統一が回復されれば、剰余労働は消滅する。「資本主義的生産形態の廃止は、労働日を必要労働だけに限ることを許す。」(*Ibid.*, I, S. 552)
- 4) 「賃労働とその使用との独自の規定性—賃労働は自分と交換される商品の価値を増大させ剰余価値をうみだすという規定性—」(*Mehrwert*, MEGA, II /3・3, S. 1124)。
- 5) 『賃労働と資本』でのエンゲルスによる序論は、労働力と価値法則との関係にかぎった言及にとどまる。「『労働』の価値から出発したかぎり最良の経済学者をさえ挫折させた困難は、われわれが『労働』の価値の代わりに『労働力』の価値から出発するやいなや消えてなくなる。」(『賃労働と資本』国民文庫、村田陽一訳、20ページ、圈点—エンゲルス、原著1849年刊) けだし、『賃労働と資本』序論での問題の急所は、古典経済学の破産原因の指摘にあるからである。

2 古典派と剰余労働

前節で、労働力商品の意義は、価値法則との整合性のみならず、剰余労働の生成に作用する対立的な所有関係を内蔵する点にもあることを説明した。本節では、労働力商品の販売をみとめながらも、蓄積財源をうむ労働を即剰余労働とみなす一部の根づよい主張は、古典派経済学への逆流であるゆえんをとく。

スミスによれば、初期未開の社会は、自給自足の体制をなし、蓄積財源を生産しない。ところが、人間のもつ自然の性向である商品交換によって社会的分業が深化してゆく。けだし、自分の得意な生産活動の余剰部分の交換による方が、自家生産よりも自己の利益になるからである。一方、その分業がなりたつ先行条件には、生産財や消費財からなるストックの蓄積がある。なぜなら、自分のつくった商品が売れるまでは、蓄積されたストックの消費を余儀なくされるためである。したがって、ストックの蓄積を物的な基礎としつつ、商品交換になかだちされて、スミスのいう分業が成立する。こうして、商品交換の発展とともに分業も本格的に発展すれば、蓄積財源の生産もさらに増進し、蓄積財源に実をむすんだ剰余労働は一般にひろく剰余価値にあらわされることになる。だから、スミスにとっては、商品交換の本格化は、同時に剰余価値の生成をいみする。その結果、スミスのばあい、社会的分業を構成する独立生産者どうしの単純な商品生産と資本主義¹⁾との本質的な区別がつかなくなる。けだし、小商品生産者自身、賃労働者とおなじように、剰余価値をうみだすからである。スミスにおいて、たんなる商品生産と資本主義的生産が混同される理由は、ここにある。「アダム・スミスは、商品生産一般を資本主義的生産と同一視している。²⁾」(*Kapital*, II, S. 387)

これまでに、スミスは、蓄積財源をつくる労働をもって、直接、剰余価値の実体としての剰余労働と等号(=)でむすびあわせる事実をたしかめた。『資本論』にあっては、蓄積財源をつくる労働は、超歴史的な労働過程の次元に属する一方、剰余労働は、価値増殖過程に固有に帰属する。したがって、マルクスにならって労働力商品の販売をみとめたとしても、蓄積財源をうむ労働を無媒

介的に剰余労働とみなすならば、マルクスの古典派にたいする進歩はおおきくかきけされる。マルクスをしることは、古典派との相違をしることにひとしい。だから、蓄積財源をつくる労働を剰余労働とみなす古典派の見方³⁾を『資本論』にそのまま機械的に延長すれば、マルクスは古典派にひきもとされる。

以上、本節で、蓄積財源をうむ労働を剰余労働とみなせば、とりもおさず、小商品生産者は剰余価値を創造するという古典派の発想におちいる難題をあきらかにした⁴⁾。

- 1) 「資本主義的生産様式は特別な種類の、独自の歴史的規定をもつ生産様式だ。」(Ibid., III, S. 885)
- 2) 小商品生産と資本主義的生産の同一視は、個人的所有 (= 自己労働にもとづく所有) と資本主義的所有 (= 他人労働の搾取にもとづく所有) とのそれとおなじ事柄に帰着する。「経済学は二つの非常に違う種類の私有を原理的に混同している。その一方は生産者自身の労働にもとづくものであり、他方は他人の労働の搾取にもとづくものである。」(Ibid., I, S. 792) たんなる私的所有 (= 個人的所有) と資本主義的所有との同一視は、資本主義の基礎の上では、社会的分業と工場内分業の混同とおなじである。なぜなら、社会的分業を構成する個々の資本家は、おのおのたんなる商品生産者として相対する一方、工場内分業は、資本家による生産条件の排他的所有をあらわすからである。だから、『資本論』第I巻第12章第4節での両者のスミスによる混同批判は、同時に個人的所有と資本主義的所有とのそれへの批判でもある。
 なお、資本主義的所有は、剰余価値生産のいいかえであると同時に、資本のそれでもある。「資本、すなわち他人の労働の生産物にたいする私的所有」(『経済学・哲学手稿』国民文庫、藤野渉訳、51ページ、圈点—マルクス、1844年ごろ執筆)。資本は、剰余価値生産で代表されるからである。
- 3) リカードのばあいも、おなじである。「さてリカードウだが、彼にあってもまた、賃労働と資本は、使用価値としての富を生むための自然的な社会形態としてとらえられ、そのための明確に歴史的な社会形態としてとらえられてはいない。すなわち、賃労働と資本とはまさに自然的なものである。」(Grundrisse, MEGA, II/1・1, S. 246, 圈点—マルクス)
- 4) マルクスのばあい、賃労働者だけが剰余価値をうみだすため、賃労働だけが資本主義に独特な生産的労働である。これにはんし、スミスのばあい、単純な商品が剰余価値をふくむため、生産的労働の規定に、商品をつくる労働と剰余価値をうむ労働という二つの異質な契機が混入することになった(『諸国民の富』I, 大内兵衛・松川七郎訳、岩波書店、313[原]ページ)。

3 剰余労働＝超歴史説と単純流通

前節で、蓄積財源をつくる労働を剰余労働と区別しない見方は、マルクスの古典派への解消である理由をといた。ところが、その古典派の所見にしたがえば、労働力は、生産過程で、その自然的な属性の発揮によって、自動的に剰余価値を創造することになる。そのため、労働力が明示的に登場する以前の単純商品流通は、小商品生産者からなる売買関係の表現だと考えられがちになる。ひとは、剰余労働につらぬく社会的な契機を閑却する必然的な帰結として、単純な商品生産と資本主義とを、労働生産物だけの商品流通にもとづくかそれとも労働力商品が流通する基礎上的生産かの相違として認識しがちな傾向におちいる。そこには、商品流通の発展段階の差異だけが歴史的な要素としてみとめられ、労働力の生産的消費につらぬく生産条件の排他的所有の作用がみおとされるという根本欠陥がよこたわる。そこで、本節では、蓄積財源をつくる労働を剰余労働とみなす立場は、じつに、単純流通をもって理論上小商品生産者どうしの貨幣関係とみなす考え方と有機的なつながりをもつ事実を主張する。

資本主義において、剰余労働は、生産条件からの労働者の分離に起因するというマルクスの理論にしたがえば、資本主義の重層性は、つぎのように理解される。すなわち、資本主義では、生産要素がすべて商品として生産過程にはいりこむ。しかも、労働力をふくむ発展した商品流通では、資本家と労働者とは、ともにたんなる商品所有者としてのみ相対することから、対等平等な関係にたつ。これにはんして、生産過程では、生産条件の排他的な所有をあらわす資本家は、圧縮された必要労働をこえて労働日を延長し剰余労働を強制する。生産過程では、単純流通とは正反対に、資本家と労働者は、支配と従属の階級関係にたつ。したがって、資本主義は、労働力をふくむ単純流通という基礎と支配従属関係があらわれる剰余価値生産という本質的機能との二つの契機からなりたつことになる。

ちなみに、マルクスは、資本主義的生産様式の「二つの特徴」(*Kapital*, III, S. 886)として、第一に、「商品であることがその生産物の支配的で規定的な性格

である¹⁾」(Ibid.) 点をあげ、第二として、「生産の直接的目的および規定的動機としての剰余価値の生産」(Ibid., S. 887) に言及している。ここで、商品が生産物の一般的形態であるという第一の特徴には、労働力の商品化が内包されていることに注目してよい²⁾。なぜなら、生産手段と生活手段からなる労働生産物の商品への全面的な転化は、資本家による生産条件の排他的所有と同義だからである。だから、剰余価値生産の基礎としての単純流通は、労働力をふくむ全面的に発展した商品流通である。

ところが、剰余労働をもって労働力のいわば本来的な属性とみる立場にあって、剰余労働自身にその生成をもたらす社会的な要素がふくまれないという認識から、単純に生産物と労働力との商品化を規定する生産関係の差異のみに着目される。もし剰余労働が階級関係の作用によるとすれば、流通部面での対等な商品所有者どうしの関係と区別して、生産過程での労資の支配従属関係を別個に規定する必要性がうまれる。ぎゃくに、剰余労働を労働力の自然的な属性とみなす立場からすれば、『資本論』第1巻第1篇では、労働生産物の商品への転化を規定する単純な商品生産関係が分析対象となる一方、第2篇から労働力商品が登場するより高度な生産関係が問題になると理解される。

「マルクスの学説によれば、資本主義の本質的な標識はつぎのとおりである。(1) 生産の一般的形態としての商品生産。…資本主義の第二の標識は、(2) 労働生産物ばかりでなく、労働そのものも、すなわち人間の労働力も商品形態をとる、ということである。」(レーニン「ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判」『レーニン全集』第1巻、大月書店、471ページ、圈点—レーニン)

ここで、資本主義の一般的前提³⁾としての単純流通について、せまいとらえ方がある。単純流通を小商品生産者間の取引とみなすばあい、単純に生産物の商品への転化がそのふくむ剰余労働の剰余価値への還元のための前提条件と理解されるにとどまる。つまり、生産要素はすべて流通から商品として取得されるから、労働力をふくむ商品取引が剰余価値生産の前提である単純流通だとして二つの契機が重層的には把握されない。そもそも、資本とは剰余価値をうむ価値と規定されるから、価値が主体となって自己増殖する。「この価値は、

それが価値であるということによって、価値を創造し、価値として増大し、ある増加分をえるのである。」(MEGA, II/4・1, S. 123, 圏点—マルクス) 資本主義＝「交換価値を土台とする生産」(Grundrisse, MEGA, II/1・2, S. 582) という表現も、価値による剰余価値創造という主体と客体とのあいだの因果関係を内蔵している。剰余価値生産とは、価値増殖にひとしい。「資本とは自己を増殖する価値である。」(MEGA, II/3・6, S. 2319, 圏点—マルクス) まさしく、剰余価値をうみだす主体は、価値そのものである⁴⁾。したがって、剰余価値生産の前提条件は、生産要素がすべて価値をもつ商品形態で市場から調達されることである。「賃労働にもとづく生産としての資本は、流通を、その全運動の必然的な条件かつ契機としての前提している。」(Grundrisse, MEGA, II/1・2, S. 318f.) だから、価値の前貸がおこなわれるかぎりでその自己増殖分として剰余価値がなりたつという立場にたてば、剰余価値生産の基礎は、一義的に労働力を内蔵する商品流通でなければならない⁵⁾。ところが、いわば超歴史的に剰余労働をみとめる所説では、剰余価値が価値そのものの自己増殖分だというポイントが閉却される⁶⁾ その反面で、生産物のふくむ剰余労働は、商品交換がなりたつ市場で、不可避免的に剰余価値に還元されるという寸法になる。ここでは、一定水準以上の労働生産性の基礎上で、労働力がつねに剰余労働を支出するという認識から、その剰余労働が物質的な形態で剰余価値に還元されるしくみに関心ははられるため、剰余労働の剰余価値への還元の要件として、生産物の商品への転化が注目され、結局、剰余価値生産の前提である単純流通として、小商品生産者どうしの商品交換が想起されることになる。

以上、本節で、剰余労働を労働力の本来の性格とみなす見解が単純流通の従来説とのあいだに内包するつながりをあきらかにした。ちなみに、単純流通を小商品生産者どうしの貨幣関係とみる考え方は、事実上、古典派のそれである。なぜなら、古典派は、単純な商品生産のなだらかな発展過程のなかで資本主義をとらえ、自営業者による生産をもって多数の労働者を雇用する工場経営の原型とみなしているからである。自営業者と資本家との相違は、剰余価値をうみだす資財のおおきさのちがいにしかない。「職工または靴屋のような独立の職人が、自分自身の仕事のための原料を購買したり、その所産が売りさばけるま

で自分を扶養したりするのにたりるよりも多くの資財を獲得したばあいには、その仕事によって利潤をあげるために、かれはこの剰余で自然に一人またはそれ以上の日雇職人を雇用する。この剰余が増加すれば、かれは自然に自分の日雇職人の数を増加させるであろう。」(前掲『諸国民の富』I, 71[原 ページ]) そのいみでは、単純流通の従来説は、剰余価値創造を包含する小商品生産に資本主義の原型をもとめる古典派の議論の改版とみなして大過ない。

- 1) 「資本主義体制では、直接的使用価値のための、生産者たちの自家使用のための生産は最も完全に廃止されている。」(*Kapital*, III, S. 589)
- 2) 「資本主義時代を特徴づけるものは、労働力が労働者自身にとって彼のもっている商品という形態をとっており、したがって彼の労働が賃労働という形態をとっているということである。他方、この瞬間からはじめて労働生産物の商品形態が一般化されるのである。」(*Ibid.*, I, S. 184)
- 3) 「商品生産と商品流通は資本主義的生産様式の一般的前提なのだ。」(*Ibid.*, S. 374)
- 4) 価値こそ資本の構成要素をなし剰余価値をうむ主体だから、商品流通のなかでなければ、資本はなりたらず、剰余価値はうまれない。つまり、商品流通は、剰余価値をうむ主体である価値の運動部面だから、まずもって、資本は、流通から発生しなければならぬという一命題が成立する。「資本は、流通のなかで発生しなければならぬと同時に流通のなかで発生してはならない。」(*Ibid.*, S. 180, 圏点—頭川) 『資本論』第I巻第2篇第4章第1節「資本の一般的定式」のテーマはここにある。第4章第3節「労働力の売買」では、労働力商品を媒介にして、剰余価値生産の前提として貨幣の資本への転化を結論する。ただし、労働力は、価値の源泉としてそれよりもおおきな価値をうむ可能性を内包するため、貨幣は、流通上で、資本へ可能的に転化するからである。第2篇第4章の表題が「貨幣の資本への転化」であるゆえんである。生産過程で剰余価値がうまれるのは、まえもって貨幣が可能的によりおおきな価値をうむ資本だからである。まさに、資本から剰余価値がうまれる。剰余価値生産によって、貨幣は現実的に資本へ転化することになる。「資本による絶対的剰余価値の創造」(*Grundrisse*, MEGA, II /1-2, S. 320, 圏点—マルクス) という表現が明示するとおり、第3篇表題「絶対的剰余価値の生産」は、資本による絶対的剰余価値の生産であることに注意してよい。
- 5) 「われわれは商品を取り扱うが、それは、われわれが資本主義的生産の最も単純な要素としてのそれから出発するということによってである。」(*MEGA*, II/3-4, S. 1302) 『資本論』が商品の分析からはじまるのは、資本が価値からなりたつからである。資本主義にあって、商品は、価値をもつ富の基本形態である。
- 6) 等価交換によらない「搾取の数学的証明」は、本質上、商品価値を前提しないで剰余労働をとく点で、重農学説とおなじ論理的な飛躍をふくむ。

むすび

本稿で、古典派からのマルクスへの転回という観点にたち、剰余労働や単純流通にかんする両者の差別性を強調した。『資本論』にかんする旧来のパラダイムは、労働力を商品としての労働におきかえれば、古典派の議論と同工異曲である事実に注目してよい。けだし、スミスにあっては、小商品生産者による交換取引を始点として、分業の発展によって剰余労働が本格的にうまれるしくみがとかれる構成をなし、商品としての労働を労働力に転換すれば、小商品生産者による単純流通から労働力商品の登場するあたらしい生産関係への展開という従来の考え方にころもがえすることになるからである。そのいみで、先行研究の一部に根づく存在する剰余労働や単純流通にかんする見解は、古典派の学説の再版だともわれる。労働力商品の承認をのぞけば、古典派経済学からの『資本論』の転回は、いまだ十分には消化されていない。

おもうに、『資本論』研究のもつ宿弊は、ひっきょう、剰余価値が前貸しされた価値の創造物だというマルクスの発見の看過に起因する。もし、まっとうに「剰余価値を生産する価値」(*Kapital*, II, S. 35, 圏点—頭川)としての資本概念をふまえるならば、独立生産者は、生産条件をうしなうのに対応して剰余労働を支出することになる。それと同時に、剰余価値生産の基礎は、全生産要素が商品として入手される単純流通であるという事柄もおのずからあきらかになる。「資本自体がブルジョア社会の基礎である」(*Grundrisse*, MEGA, II /1・1, S. 246) 関係と対応して、剰余価値をうむ価値という資本のシンプルな規定は、金本位制度にしめる中央銀行の金属準備の役割と同様、『資本論』の名実ともに文字どおりの軸点である。